掲載日：2018年03月12日，面名：特集１，記事ID:KIJ20180312_A0004000101E32001

(C)沖縄タイムス社

第55回沖縄タイムス教育賞　19日贈呈式・祝賀会

輝く未来へ 支援全力

第55回沖縄タイムス教育賞に、県内の学校現場や地域で優れた研究、実践活動を続ける２氏１団体が選ばれた。受賞者の活動と抱負を紹介する。贈呈式・祝賀会は19日午後６時半から、那覇市の沖縄かりゆしアーバンリゾート・ナハで。会費は一般５千円、高校生３千円、中学生以下無料。問い合わせは沖縄タイムス社読者局文化事業本部、電話098（860）3588（平日午前10時～午後５時半）。

子ども育成に地域一丸

■ 社会教育　**陽迎橋自治会**　浦添市



子どもの居場所づくりに取り組む陽迎橋自治会

2007年に発足した浦添市の陽迎橋（ようげいばし）自治会（知花聡会長）には、年間で平均すると毎日約30人の子どもたちが訪れる。放課後の子ども教室として、三線や琴の指導、学習支援を実施するほか、地域の大人がボランティアで食事を提供する。「いつでも誰でも来ていい場所」。そんな雰囲気が、子どもたちの心のよりどころになっている。

自治会設立当初の約10年前、会室は昼間はほとんど活用されていなかったという。2011年度から土日も個別に子どもたちを受け入れてきた。

知花会長は「自治会活動の中心を『子ども支援』にしたことで、親が自然に集まり、地域とのつながりも広がった」と振り返る。毎月、自治会の広報誌を発行し、子ども支援の活動を地域に発信。イベント時には多くの大人がボランティアで参加するようになった。

夏休みの朝のラジオ体操では地域の中学生が活躍し、準備や運営を仕切る。ボランティアなどで地域に貢献した中学生を表彰する仕組みを作り、地域のリーダー育成にも力を入れてきた。

一方、支援を続ける中で、子どもたちを取り巻く環境の複雑さも見えてきた。いじめや経済的困窮、ひとり親家庭などさまざまな課題を抱えた子どもは多い。きめ細かな支援を目指し、約3年前には子ども支援部会を設置した。

地域の自治会や学校、社協が月1回集まって情報共有し、子どもや保護者の支援の方策、それぞれの役割分担などを話し合う。個人情報の管理や守秘義務の徹底には細心の注意を払っている。

「部会が子ども支援のプラットホームの役割を担い、そこでの話し合いを自治会の子どもの居場所づくりに連動させることで、より必要な支援を確実にできる」。知花会長は、学校や社協と連携した取り組みの成果を実感している。

不登校気味だった子が、自治会の行事で友達ができ、自然に学校に通うようになった事例もあった。「支援のニーズはどんどん高まっている」。切れ目のない活動と支援の拡充を目指し、前を見据える。

講評　武富和彦選考委員長

子の貧困対策を形に 「心に響く」創意工夫

今年は、昨年を大きく上回る16件の応募があった。小中高校、特別支援学校のほかPTAや社会教育施設などから推薦されただけあって、いずれも素晴らしい教育者・団体ばかりだったが、その中でも特に優れた実践的研究を継続してきた2個人1団体が「沖縄タイムス教育賞」に選ばれた。受賞者には心から敬意を表したい。

今回、社会教育部門に「子ども支援」を二つの項目として新しく位置付けた。選考委員会で昨今の「子どもの貧困」を巡る社会の動きを踏まえた提案があり、それを形にした。この分野で受賞した陽迎橋自治会は、自治会活動の中心に子ども支援を位置付け、地域で子どもを育てる地道な活動の積み重ねが評価された。多様な環境で暮らす子どもたちの成長を促す、多様な「受け皿」の一つだ。次代を担う子どもたちに地域社会がどう関われるのか。陽迎橋自治会の活動は、地域住民や父母、学校関係者にたくさんの示唆を与えてくれる。

個人で受賞した比嘉ゆり子教諭は、中学校の国語指導で短歌や琉歌の批評文、民話や紙芝居を使った教材開発などを通して国語の魅力を幅広く伝えてきた。金城満教諭は工業高校の美術指導でICTを活用した教材の円滑利用など情報技術を教育現場になじませた。両教諭が創意工夫を重ねた実践は「心に響く」とも評価された。教育に対する熱意をたたえたい。

受賞を逃した応募の中にも優れた指導・活動がうかがえる実践があった。ただ、指導者と子どもの関わり、子どもの成長に与えた影響などが資料から十分に読み取れない例があった。素晴らしい実践だろうと推測されるものの「資料不足で評価できない」と指摘されるケースもあり、第三者が客観的に評価しえるよう資料の充実を図り、あらためての応募を求めたい。

残念なのは宮古・八重山地区からの応募がなかったことだ。来年度は県内全地域から多数の応募があるよう期待したい。

（沖縄タイムス社常務取締役）

デジタルで好奇心刺激

■ 学校教育

金城満さん

浦添工業高校教諭



口癖は「人間は、面白いものにしか動かない」。iPadを使って音楽を編曲する授業に取り組むなど、美術教諭として専門外であるはずの発展目まぐるしいICT（情報通信技術）の探求を怠らず、授業で実践してきた。

新米教諭の頃、職場にパソコンが配置されたが全員使い方が分からず、「新人だから」とパソコンでの成績処理業務を任された。必要に迫られて勉強するうちに、「これからの時代、授業でも欠かせない道具になる」と確信。日本デジタル教科書学会にも2012年の設立当初から所属する。

授業で積極的にデジタル機器を取り入れ、現在は生徒同士がiPadで調べ物をして教え合うアクティブラーニングにも取り組んでいる。ポイントは「インターネット上には信頼できない情報も多い」と注意を呼び掛けることだ。

また、美術作品は感性で描くイメージがあるが「本来、デッサンには理屈があり数値化できる」とし、13年にはデッサンの色合いの明暗と濃淡をグラフ化。生徒が自身の作品を見直す際の材料にした。

一方で、「美術表現」を通した平和教育にも力を入れてきた。体験談を受け身で聞くのではなく「どうにか生徒自身に沖縄戦を体験させたい」と1996年に取り組んだプロジェクトが「石の声」だ。生徒ら約600人で、沖縄戦没者約23万人と同数の石に番号を手書きし、積み上げた。作業中に生徒が「石が骨に見えた」と言い出すなど、体験を通して生徒の心に平和を訴えかけた。

これらの教育に共通するのは、一方的に知識を与える教育からの脱却だ。今後も「子どもたちが体験から学び表現し、人生を豊かにできるよう共に歩めれば」と語った。

きんじょう・みつる　1959年生まれ。那覇市出身。琉球大学大学院教育学研究科修了。開邦高校芸術科、南部工業高校コンピュータデザイン科などを経て2012年から現職。ICTを活用した授業や、美術表現活動を通した平和学習にも取り組む。

言葉の持つ力を信じて

■ 学校教育

比嘉ゆり子さん

名護市立屋部中学校



国語の教員として、言葉の力を信じている。

大学で教員免許を取ったものの、20代にかけて民話の採録や出版に明け暮れた。生徒の人生を左右する教員の仕事は、少し怖かった。

転機は、難病で入院していた少女との出会い。月1回、民話語り聞かせのボランティア訪問を心待ちにしてくれた。

「貧しい人が幸せになる話には、本当に目を輝かせていた。自分の境遇と重ねていたんだと思うと振り返る。少女は亡くなり、つらい思いをしたが、民話の力を教えられた。学校現場で伝えたい思いが募り、32歳で教員に転身した。

培った人脈を生かして民話の話者を学校に招き、生徒と共に地域を歩く。保護者の協力を得て民話を劇や紙芝居にしたことも。「地域にはいっぱい教材がある」

勤務する屋部中学校の校区内にある自身の実家も例外ではない。記録作家上野英信氏の「眉屋私記」で波乱の歩みが描かれた屋号「眉屋」の出身。いつか教材にしたいと考えている。

キューバから訪れた親戚の女性には、こんな話を聞かされた。「革命で全て持っていかれた。だけど、父が私に残した教育だけは持っていかれなかった」。教育の力を改めて知った。

生徒はさまざまな家庭の事情を背負っている。気持ちを吐き出し、自分を見つめ直す機会に作文を使う。執筆から発表まで指導は厳しいが、生徒は大きな成長を見せてくれる。全県コンクールでの入賞が続く。

荒れる学校に退職を考えたこともあれば、指導に手を焼いた生徒が卒業後に「ありがとう」と書いたケーキを持ってきたこともある。「目の前にいる生徒ではなく、その子の10年後を見ること」。先輩教員からもらった言葉を胸に、一人一人と向き合う。

ひが・ゆりこ　1959年名護市生まれ。沖縄国際大卒業。宜野座教委、沖国大遠藤庄治研究室での民話研究を経て93年名護市立大宮中に採用される。2013年度文部科学大臣優秀教職員表彰。